

言語類型論から外国語教育へ

峰岸真琴

(みねざし まこと)

1 多言語教材の開発

言語の多様性および普遍性のあり方についての研究である言語類型論は、外国語教育という実践の現場からは縁遠いもののように感じられるかもしれない。ここでは東京外国語大学（東外大）で開発が進行中の多言語学習教材の一部として、筆者が担当する「通言語的文法教材」において、言語類型論の考え方がどのように取り入れられているかを紹介する。文部科学省の「21世紀COEプログラム」として採用された東外大の「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」（代表者・川口祐司教授、平成14～18年度）では、研究・開発の一環として、web上で利用可能な多言語教材を開発している。現在、17の言語（そのうち6割以上がトルコ以东のアジアの諸言語）について、発音モジュール、会話モジュール、文法モジュールの一部が公開されている。以下のURLを参照いただきたい。

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/index.html>

2 教材開発上のねらい

今回の教材開発においては、以下のような目標を立てた。まず、コストや人材の面で一般には開発が難しいアジアの「マイナーな言語」を含めて、映像と音声を伴うマルチメディア教材を作ることで、その際、多言語の教材全体に統一的なデザインを与えるとともに、技術的にはXMLタグによるデータの構造化を図り、教材の部品がさまざまな形で再利用できるようにする。とりわけ大学での教材使用を考えると、それぞれの言語について効率的な学習を可能にすると同時に、通言語的に言語の類型や機能の表れ方を見渡すことで、「言葉とは何か」を考える機会を提供するための、言語学の入門教材としても使えるものにしたいと考えた。

3 専攻語の類型と教材の特徴

東外大の専攻語を類型論的な見地からみると、ユーラシア大陸のSOVあるいはSVO語順、従属部標示型の言語ではぼ占められ、系統的にも地域的にも偏りがある。VSO語順や主要部標示型の言語、南北アメリカ大陸、オセアニア、ユーギニア、アフリカの諸言語は含まれていない。つまり、他大学と比べれば多様であるとはいえ、類型論的にはごく「普通の言語」であることがわかる。

しかし、このことは統一的な教材の開発が容易であることを意味しない。それぞれの専攻言語ごとに、長年の教育経験にもとづいた、こうすれば効率的に修得できるといった伝統的教育法があり、さらには言語の類型的な違いによってその教育方法が規定されることもあるためである。例えば、ロシア語のように複雑な形態変化を持つ言語では、パラダイムを順を追って学習する必要があるが、主題卓

立型で形態変化を持たない中国語では、特定の場面と話題の設定から学習するのが効果的である。したがって、統一教材として、形態変化などの形式優先の教育方法と、機能主義的な教育方法との折り返いをつけることは難しいのである。

そこでこの問題に関する対処法として、2つの方法を考えた。

第一は、機能主義的観点を導入することである。「疑問、依頼」といった共通のコミュニケーション機能を選択して、各言語においてそれぞれの機能がどう実現されているかを学ぶ教材とリンクする。これによって、例えば「知覚」や「感情」を表す表現が、多くの言語において特殊な構文や助詞の用法を持つことを、通言語的に見渡すことができる。

第二は、類型論的視点を導入することである。各言語における文法項目をまとめて一般化し、通言語的な視野から解説を施した教材を開発し、そこから各言語の実例へとリンクする。諸言語の文法を

極端に抽象化すれば、言語形式の範例的な関係および連辞的關係との選択方法に尽きると考えられる。具体的には、「名詞」を中心とした構造および「動詞」を中心とした構造が、諸言語によってどのように構成されるかを中心に、文法項目を整理することを試みている。

同教材の開発は、言語類型論の観点を教材開発に活かし、各言語の文法学習の内容を一般化、抽象化することで、言語類型論、さらには言語学一般を学ぶための基礎的な材料を提供する試みでもある。言語教育学の面でも、対面での実践的教育の内容を選択しながらweb上に移植する過程で、学習内容のうちどの部分がweb上で効率的に学習可能か、逆にいえば対面教育に残すべき部分とは何か、さらには「教える」とはどのような行為なのかという、教育の本質を考え直すための良い機会ともなっている。

（東京外国語大学 アジア・アフリカ

言語文化研究所／言語基礎論）